村のくらし

# 鴨のロースト

Hyunckel＆Maam

芳流（kaoru）

写真　ＡＣフォト様

# 鴨のロースト

**芳流（kaoru）**

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15708926**

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム

最終回から数年後のネイル村。「村のくらし」novel/15411188の数か月前。ほぼ同時期、同シチュエーション。
表紙はＡＣフォト様。

くだんの「料理の腕（ポンコツ部門）ランキング」は、おそらく技術のことを言っているのでしょう。
ただ、料理って、モチベーションの影響が大きくて、「美味しいものを自分が食べたいと思う/美味しいものを 誰かに食べてほしいと思う」その気持ちに左右されると思っています。だから、長兄、どうなのか、と。
また、マァムの「おおざっぱ」ってこういう意味かなと思い、突発的に執筆（たぶん、実質２日くらい・・・）。
料理って、日常なんですよね。

なお、技術・モチベーションを総合しても、この分野での一番は、使徒の中では、確かに次兄だと思います。

2021.11.3　シリーズ組み換え。
2022.10.30　表紙変更

# Table of Contents


- 鴨のロースト

# 鴨のロースト

　ヒュンケルが玄関を開けると、室内から肉の焼ける食欲を誘う香りが漂ってきた。奥のキッチンからマァムがひょっこりと顔を出した。彼女は、ヒュンケルの帰宅を認めると、ぱっと花が咲くように笑顔になった。
「おかえりなさい、ヒュンケル。」
　もはや日常風景になった光景ではあったが、帰宅してマァムの笑顔があることに、ヒュンケルは心から安堵した。
　ヒュンケルは、荷物を部屋の片隅に置くと、キッチンで水を１杯もらった。体に水分を取り込み、ほっと一息つくと、彼は、ダイニングテーブルについた。
　その彼に、マァムは、キッチンから声をかけた。
「ごめんね、もう少しで焼けるから、少し待っててくれる？」
「ああ。」
　ヒュンケルの視線の先では、調理台で、マァムが手元を忙しそうに動かしていていた。マァムは、ボウルにゆでたじゃがいもを入れていき、それをマッシャーで潰していった。
　そのうち、マァムは、背後のオーブンに目をやると、その扉を開けた。香ばしい香りが一層濃くなる。マァムは、ミトンをつけた手でオーブンの中身を取り出すと、熱そうに、それを調理台に運んだ。
　そのオーブンプレートの上に乗ったものを見て、ヒュンケルはつぶやいた。
「鴨か。」
「うん、そう。
うまく焼けてるかな・・・。」
　そう言いながら、マァムは、鴨を冷ます間、バゲットとチーズを切って、盛り付けていった。
マァムが夕食の支度に勤しむ中、次第に夜の気配が忍び寄り、室内も陰ってきた。ヒュンケルは、燭台のろうそくに灯をともした。ほんのりと温かな光が、テーブルの上を照らした。

しばらく待っていると、やがて、ダイニングに、順に今日の夕食が並べられていった。
　鴨のロースト。
　マッシュポテト。
　パプリカとズッキーニのピクルス。
　チーズにバゲット。
　その光景に、ヒュンケルは感嘆の声を上げた。
「豪華だな。」
本当は、これにビーツのスープもつけたかったのだが、手が回らなかったのだ。この程度の夕食でもヒュンケルに喜んでもらえるのは、マァムとしては、嬉しいが、気恥ずかしかった。
「そう？ピクルスは作り置きだし、オーブン料理って楽なのよ。火力さえ間違えなければ、あとは時間と火が、食材をおいしくしてくれるわ。私は、母さんほどはできないけどね。」
　そう言って、マァムは、いたずらっぽく笑った。その言葉の間にも、マァムは、皿を並べていき、最後にグラスをテーブルに置いた。
「少しだけど、ワインも出すわよ。今日は疲れたでしょう。」
「ああ、ありがとう。」
　ヒュンケルが礼を言うと、マァムは、紅色のワインをグラスに注ぎ、ヒュンケルに差し出した。マァムも、自分のグラスに半分だけワインを注いだ。
　ようやくマァムが食卓に着くと、二人きりの夕食になった。
　ヒュンケルは、鴨のローストを１切れ、チーズとともにバゲットの上に乗せると、それを口に運んだ。
　控えめなセージ、タイムの香りと、塩気が、しっとりとした肉の旨味とよく合っている。ヒュンケルは素直に感想を述べた。
「旨いな。」
「そう？よかった。私がヒュンケルにこれを出すのは初めてだったから、ちょっと心配だったの。」
　マァムは、ほっと安堵したような顔を見せた。
「母さんの得意料理だから、私も教わっていたんだけど、こっちの

家に住むようになってからは作ってなかったし、このオーブンで焼くのも初めてだったから、どうかなあって。でもよかった。ヒュンケルの口に合って。」
　すると、ヒュンケルは、穏やかな笑みを浮かべ、言葉を紡いだ。
「お前が作るものはいつも旨いと思っているよ。」
「ありがとう。」
　マァムは、照れたようにはにかんで、笑みを浮かべた。
「今日はどうだったの？」
「思ったよりも、畑は取れるな。川からの傾斜も使えば、水路も引けそうだ。」
「そう。」
「ただ、土は入れ替えないとだめだな。荒れている。天地を返して、腐葉土と、堆肥も入れないと、うまく作物が育たないだろうな。」
　ヒュンケルは、マァムに淡々と今日の作業について話をした。
　ここネイル村では、基本的に自給自足であり、村人たちは、それぞれ自分たちの畑を持っていた。
　しかし、村人の中には、畑仕事以外に専門的な業務に携わっている者たちがいる。
　例えば、村の方針を決め、村人たちに指示を出す長老。
　けが人や病人の治療に当たる医師、薬師。
　村人たちの悩みを聞き、相談に乗り、神の教えを説く神父。
　子どもたちに読み書きを教える教師。
　家や倉庫を作り、またその補修に当たる大工。
　灌漑工事を行い、畑の水路の整備を行う者。
　このような専門職の者たちについては、彼らがそれぞれの仕事を行っている間は、ほかの村人たちが、彼らの畑を整備してくれていた。
　大魔王との戦いが終わってから数年経った現在、ここネイル村では、医業を担当しているのは、マァムの母レイラである。
　そして、そのレイラを補佐しているのがマァム。
　長老を補佐し、その相談に乗っているのがヒュンケルだった。
　この日は、ヒュンケルは、長老の指示の下、ネイル村の森を超え

た北に、開墾できそうな土地があるとのことで、その下見に行っていたのだった。
「村から少し遠いのが難点だが、毎日歩けない距離ではない。あとは何を植えるかだが・・・。」
「小麦じゃないの？」
「確かに、収穫量を増やすのなら小麦だろう。だが、現金収入を得るのなら、商品作物がいい。綿花とか、毬花とかな。長老様のお考え次第だがな。
　どんな作物があの土地の適しているのかわからないから、小麦以外を植えるのなら、ロモスの種苗屋に聞きに行った方がよさそうだな。俺も、土木工事や灌漑工事くらいまでなら対応できるが、さすがにそこから先のことは分からん。」
　すると、その言葉を聞いて、マァムがすぐさま提案した。
「なら、明日、私が聞いてくるわ。ちょうど、母さんとロモスの城下に行く予定だったから。」
「仕入れか。」
「うん、そう。この辺で採れないハーブとか薬草とか、どうしてもあるからね。」
　レイラが医業に使うハーブや薬草は、このネイル村の周辺で採れるものが多い。だが、どうしてもこの周辺では採れないものや、珍しいハーブや薬草など、交易の盛んなロモス王都まで定期的に仕入れに行っていた。明日は、マァムも母に同行する予定になっていた。
「あとで、その畑の条件、教えて。それに合わせて聞いてくるわ。」
「ありがとう。助かる。」
　ヒュンケルは、マァムに礼を言った。
　マァムは、彼の明日の予定を尋ねた。
「明日は？ヒュンケルはどうするの？明日も行くの？」
「いや、明日は行かない。今日、杭打ちまでしてきた。あとは人手を集めないと無理だから、いったん休止だ。長老様が、追って、人を集めて作業をする日を決めるそうだ。」
「塾の方は？」

ヒュンケルもマァムも、村の子どもたちに読み書きや身のこなしを教える仕事も請け負っている。これも、長老からの依頼で行っているものであり、二人のほか、数人の村人が交代で担当していた。これを塾と呼んでいた。その村塾での仕事はないのかとマァムは尋ねているのだった。
　ヒュンケルは簡潔にマァムに応えた。
「明日はない。」
「じゃあ、明日はうちの畑ね。」
「ああ、しばらく人任せにしてたからな。 自分で見に行かないとな。」
「ごめんなさい、明日は私もいないから。」
「大丈夫だ。」
　マァムは食卓に視線を移した。
　鴨のローストは、多少、日持ちがする。スライスした鴨は、チーズやパンとの相性も良かった。固めのミニバゲットもあるから、チーズと一緒に挟んでおけば、お弁当にちょうどいい。味付けは、バジルペーストよりも、ザワークラウトの方が合うだろうか。
　そんなことを思いながら、マァムはヒュンケルに声をかけた。
「畑に行くなら、この鴨のロースト、サンドイッチにしておくわね。持っていって。」
　すると、ヒュンケルが柔らかく微笑んだ。
「ありがとう。お前は手をかけてくれるな。」
　マァムはその言葉に、不思議そうに首を傾げた。
「そう？普通だと思うけど。
　ヒュンケルだってこのくらいの料理できるでしょう？」
　その言葉に、ヒュンケルは苦笑した。
「技術的にはな。先生と旅をしていたときに一通りのことは教わった。自分のことは、一応、何でもできるようにはしてもらったからな。」
「すごいわね、アバン先生。」
「教育者としては一流だな。」
　そう言って、ヒュンケルは軽く笑った。
ヒュンケルの知識や技術は、アバンとの旅で培ったものが多い。料

理もその一つだ。ただし、魔界でヒュンケルの地位が上がってからは、侍女や従者がついていたため、自分のことをやる必要がなかった。ヒュンケルが、料理を含めた自分の身の回りのことを再び自分でやるようになったのは、魔王軍を抜けてからだった。
そのため、大魔王との戦いが終わって数年を経たいま、ヒュンケルが、自分の身の回りのことで困ることはないはずだった。少なくとも技術的には。
「だが、どうにも手をかけようという気にならん。」
　すると、マァムは、やはり不思議そうに言葉を紡いだ。
「そうかなあ・・・。朝ごはん、いつも作ってくれているじゃない？」
　朝食はヒュンケルが用意をし、夕食はマァムが作ることが多い。なんとなく、そのような役割分担ができていた。もっとも、ヒュンケルの用意する朝食は、パンやハム、チーズといったコルドミールが主で、手間がかかるのは、せいぜい、お湯を沸かして珈琲やハーブティを入れるくらいのものだった。
　マァムの言葉に、ヒュンケルは苦笑した。彼は、あれは料理というより作業のように感じていたが、それでも自分ひとりではやることではなかった。
「あれはお前がいるからだ。お前が食べると思えば、俺もやるさ。」
　ヒュンケルは、いったんそこで言葉を区切った。
「だが、自分一人では、食事など、食べられればいいとしか思わない。肉や魚を焼くのも、その方が腹を壊さないからだ。俺にとっては、その程度の感覚だ。」
　ヒュンケルにとっては、食事とは、単なる栄養補給にすぎなかった。簡単に済めばそれに越したことはないとしか思ってこなかった。
　マァムと暮らすようになるまでは。
「誰かと食卓を囲むのが楽しいものだというのは、お前が教えてくれたんだ。」
　ヒュンケルは、マァムを見つめながら応えた。穏やかな視線だった。

マァムは、ヒュンケルの眼差しを受け、恥ずかしそうにはにかんだ。
「だって、ヒュンケルにも、美味しいもの食べてほしいから。私も、どうせ食べるなら美味しいものの方がいいし。」
「そうだな。お前がそう思ってくれているのはわかる。俺が苦手な顔をしたものは次からは出さないし、味付けも、俺の好みに合わせているだろう？」
　基本的に、ヒュンケルにはあまり好き嫌いはない。
　だが、宮廷や都の飲食店で出されるような凝った料理や複雑な味付けは、苦手としていた。
「今日だって、俺が測量で疲れて帰ってくるだろうと思って、鴨を焼いてワインまで用意をしてくれた。
料理にしても、俺はあまりごてごてと手を加えたものは好みではないし、味付けもあまり濃くない方がいい。お前はそれに合わせてくれているだろう？この鴨にしても、レイラさんが焼くよりも、塩もハーブも控えめだ。」
　その言葉に、マァムは、驚きとともに、嬉しさを感じた。
「・・・気づいてたの？」
「気づいてたさ。」
　ヒュンケルは、彼らしくなく、得意げな笑みを浮かべた。しかし、すぐにそれを消して、穏やかな眼差しをマァムに向けた。
「その心遣いが、嬉しかったんだ。」
　ヒュンケルの言葉の裏に見える彼の思いに感じ入り、マァムは頬を染めた。マァムは、料理には自信がなかっただけに、彼の言葉はうれしかった。
「私もね、子どものころからご飯の支度はしていたの。母さんと交代でね。母さんからは、たくさんのレシピを教えてもらったわ。」
　そして、マァムは、子どものころからのキッチンの思い出を振り返りながら、言葉を続けた。
「でもそのどれもね、おもてなし料理とか、名前のある料理とかじゃなくてね。私も、作ろうと思ったら、その日、家にあるものとか、仕入れてきたものとか、材料を見てから決める感じで。これを作ろうって決めて準備するわけじゃないから。家にあるもので思い

つくままに作ることしかできなくて。
　おおざっぱっていうのかな。
　適当っていうか。
　だから、ちゃんと作れてるわけじゃないのよ。」
　すると、ヒュンケルが思わぬことを尋ねてきた。
「何故家にあるものを見てから作ろうと思うんだ？」
　マァムは即答した。
「だって、もったいないじゃない。放っておいたら痛んじゃうもの。うちにある食材は、みんな、自分の畑で採れたか、村の誰かが作ってくれたものだから。」
　マァムのその言葉に、ヒュンケルはおよそ食事や料理とは無関係に思われる言葉を添えた。
「それは、お前の優しさだな。」
「優しさ？」
　ヒュンケルはうなずいた。
「ああ。食材も命だと思っているのだろう？作り手の気持ちもある。だから無駄にしたくない。お前の優しさは、こんなところにも現れているのだな。」
　そして、彼は食卓に視線を落とした。
「俺にはこれで十分だ。凝ったものは何もいらない。ただ、お前が俺のためを思って手をかけてくれている。それだけで、俺にとっては十分なごちそうだ。」
　ヒュンケルは、マァムを見上げ、冗談めいた口調で言った。
「それに、素朴な料理の方が俺には合っている。」
　マァムは嬉しくなって、ヒュンケルに礼を言った。
「ありがとう。
　でもね、私も、あなたがそう言ってくれるから、おいしいって言ってくれるから作るの。あなたのおかげでもあるわ。」
「そういうものか？」
「そういうものよ。」
マァムは、いたずらめいた笑顔を浮かべた。
「それに、あなたと暮らすようになるまでの間、ちょっとは練習したのよ。」

マァムは、ふと、何かいい考えを思いついたかのような、はっと明るい顔をして、ヒュンケルに声をかけた。
「そうだ。今度、予定のない日に、ヒュンケルが夕食作ってみて。そうしたら、わかると思うわ。」
　不意の提案だったが、ヒュンケルはすぐにうなずいた。
「わかった。考えておこう。」
　ヒュンケルがそう言うと、マァムはうれしそうに微笑んだ。
　マァムは、わずかに残ったワインを飲み干し、口直しにピクルスをフォークに刺した。ピクルスを噛みながら、マァムは思い出したような顔になった。飲み込んでから、言葉にする。
「そういえば、ヒュンケルって、舌、敏感よね。」
「そうか？」
「そうよ。私がピクルスのビネガー変えただけですぐに分かったじゃない。」
「・・・それは、わかるだろう。」
「いいえ、普通はわかりません。」
「そういうものか？」
「そういうものです。」
　二人は顔を見合わせると、同時に噴き出した。
　マァムは、笑いをかみ殺しながら、ヒュンケルに言った。
「夕食作ってくれるの、楽しみにしてるわね。」
「あまり期待するなよ。」
「うまくいったら、時々作ってくれると、もっと嬉しいわ。」
「・・・善処しよう。」

　ゆったりとした食事を楽しむと、二人は食卓を片付けた。
　外から汲んできた水を洗い桶に入れ、食器やグラスを洗い、布巾で拭いて、食器棚に収納する。二人でやればあっという間だった。
　マァムは、調理台に残った水撥ねを雑巾で拭いていた。
　すると、不意に、背後からぬくもりを感じた。
　ヒュンケルが背中からマァムの肩に腕を回し彼女を抱きしめていた。突然のことに驚いて、マァムは彼の名を呼んだ。
「・・・ヒュンケル？」

彼は、マァムの肩口に顔をうずめ、柔らかく、彼女の身を抱きしめていた。ヒュンケルは、しばらくの間、言葉を返さなかったが、やがて、ぽつりとつぶやいた。
「・・・今度は、お前が欲しい。」
　熱を帯びた声だった。
マァムはどきりとした。
　この声色で、何度、名を呼ばれたことだろう。この先の予感に、マァムは身を震わせた。
—あ、食べられる。
　漠然と、そんな言葉が胸に浮かんだ。
　マァムの頬がたちまち朱に染まり、彼女はうつむいた。
　だが、彼の言葉に込められた熱に抗えるはずもなく、マァムは、小さくうなずくほかなかった。

　夜はまだ、更け始めたばかりだった。